

「渡来系技術の導入と古代山城」

明治大学名誉教授 吉村 武彦

はじめに

渡来系移住民の役割

ただ今、ご紹介に預かりました吉村と申します。もう退職してから相当時間が経ってきているのですが、研究を続けています。昨年に続き今回も報告させていただきます。

さて、私のテーマは、「渡来系技術の導入と古代山城」です。このテーマを、渡来系技術の導入、大宰府と鞠智城、そして肥後国と百済とといった順にお話しを進めたいと思います。しかし、二週間前に日本考古学協会の大会に参加するため、九州大学伊都キャンパスを訪れ、かつて韓鍛冶の木簡が出土した土地に立ち、「ああそうだ、やはり韓鍛冶の問題とか、そうすると才伎の問題等もやらなくてはいけない」ということに気が付きました。最初にその話からさせていただきます。



と思っております。

今までは渡来人という言い方をしていますが、私は出自よりも移住、移民という面を重視・強調した方がよいという考え方をもっていますので、渡来系移住民、あるいは朝鮮系移住民と言っています。渡来系移住民というのがなぜ重要か、関晃さんは、種類の技術とか知識とか文物によって、社会と文化の発展で決定的な役割を果たしたからだ、と言っています。それからもう一人、石母田正さんも日本文明の転換には渡来系移住民の貢献なくしては考えられない、とおっしゃっています。これが石母田正さんとの写真ですが、この横にいるのは私です。今から想像できないような頭の姿。これ千葉大学時代です。明治大学が人をこき使うのがいかにひどいのか、今はこんなふうになりました。（笑）それでは補足資料を見て下さい。

東アジア世界論

最初に「東アジア世界論」です。中国と朝鮮諸国、それから日本、ベトナムの四地域を、東アジア世界論という捉え方をすればどうなるのかという問題です。この東アジア世界は、漢字文化圏と言った方がわかりやすいでしょうか。西嶋定生さんは、漢字、政治思想のもとになった儒教、政治制度の律令法、それから漢訳仏典に基づく仏教を指標として挙げています。



ただし、私は西嶋説をいろいろ検討する中で、儒教の評価を律令法と並ぶような礼制の問題として考えなければ駄目じゃないかと思いつつあります。また、西嶋説では、渡来系技術という問題は説明できないんじゃないかとも思います。もちろん漢字を介している技術はわかるのですが、技術の移転には人の移動が必要ではないか、と今回準備する中で思いました。

五世紀における開発

このところ、五世紀における渡来系移住民による開発というのが、ずいぶんと評価されてきております。特に大阪にあたる河内地域の開発ですね。この河内湖とその周辺で、朝鮮式土器とか韓式土器とか呼ばれる朝鮮半島から来た土器が多く発掘されています。渡来系移住民たちがたくさん来ている、文字とおり移住して来ている、という場所になるかと思えます。最近、埴輪の研究も進んできておりまして、明治大学にいる若狭徹さんが、渡来系の人たちの埴輪を抽出する、といった面白いことやっています。須恵器とか韓鍛冶とか馬飼集団、これは河内地域を考える場合には非常に重要だということが一つであります。

それから地元肥後で考えますと、この冠帽、実は江田船山古墳から出てきているものですね。韓国でも、ほぼ同じもの、それも冠帽だけではなく耳飾りや沓など、百済の地域と共通するものがいっぱい出てきているわけです。やはり、この肥後と百済はかなり古い時期から関係があることは事実だと

思うのです。そういう交流関係がどう継承されたか、あるいはされなかったかという問題も立てる必要があると思います。

「才伎」の渡来

それで考えたのが、才伎、手末才伎と呼ばれる人たちです。才伎を技術者というふうに考えておきますと、日本列島の文明化に非常に重要な役割を果たしたということになると思います。そして、才伎について文字史料が非常に限られているので、考古学や建築学などの知識に基づいて考えていかなければならないと思っています。今回はこれを、戸令没落外蕃条の大宝令条文と養老令条文が違っているところから考えてみたいと思います。才伎とは何か、律令における才伎・長上の才伎についての当時の議論が、『令集解』に書いてあります。

まずは『日本書紀』でどのように書いてあるかという点、百濟の場合が「今來の才伎」とか「手末の才伎」とか具体的にいくつか書かれています。これによると例えば、陶部とか鞍部、それから画部、絵描きの方ですね、それから錦部とか詠語があります。「手末の才伎」の場合にも、これは漢織・呉織・衣縫といった布製品の製作技術者が出てきます。あと『類聚三代格』ですと、舞の先生とかも出てきます。歌謡とも関係してくるのでしょうか。このような特殊な職能の持ち主を才伎と言っているのです。実はこれ中国の唐令には無いんです。飛鳥浄御原令はちょっとわからないんですけど、唐

令に無く、敢えて大宝令に入れたつていうのはどうしてなのか。おそらく七世紀後半における渡来系の人達が列島に來た役割というのを、大宝令の編纂者が認識していたからだと思います。

『類聚三代格』、これは資料を一ページに収めるために、必要な箇所だけです。全文は入っておりませんが、資料に入れさせていただきました。

筑前の「韓鉄」木簡

さて、二週間前に気がついたのが「壬辰年韓鉄」木簡です。壬辰年は六九二年、持統六年です。歴史学の問題として非常に重要なのは、出土した地域である志麻郡の郡大領が肥君猪手だということです。これはやはり、肥君の問題として、肥後とも結びつきますし、韓鍛冶などの技術の問題として考える必要もあるように思っています。志麻郡の場所は皆さんの方が詳しいと思いますが、「地図をみて」このあたりですよ、渡来系と関係する「韓良郷」があります。「からかち」という地名があります。

古くは、卑奴母離という役職があったと思われます（魏志倭人伝）。渡来系移住民については、筑前の方は大宰府もあり比較的説明しやすいかと思えます。豊前の方では亀田修一さんがずいぶんと渡来系移住民のことを研究されています。ところが残念なことに、肥後では史料が少なくちよつと説明しづらい。こういう韓鍛冶の問題というのは、肥君猪手のような人物がいなければ別かもしれません。

が、七世紀後半から八世紀の初め頃、肥君一族と筑紫の肥君との関係が一体どうなっているのか、という問題に関係してきます。そして技術的問題を解く手がかりになっているのが、大宝令の没落外蕃条の才伎なのです。

技術者の渡来

養老令には記されていないのですが、『令集解』戸令没落外蕃条の中に大宝令の注釈書である「古記」に問答があります。これは今の法律問答と同じで、民法百問百答なんていう発想と同じです。その『令集解』に「問う。若し才伎有らば、奏聞して勅を聴け」と書いてあります。大宝令には「才伎」の言葉があり、渡来してきた人たちの中に技術を持っている人がいたら報告しなさい、と規定されていたのです。その規定は養老令には書いていないし、唐令にも存在しないのです。残念ながら、大宝令の前の飛鳥浄御原令ではちょっと内容がわかりません。また、大宝令の次の養老令に規定されていないのは、時代が変わったのでしょうか、あるいは日本の小帝国意識があって渡来系の才伎の規定は削ったのだろうといわれています。

七世紀後半、特に白村江での敗戦以降、渡来系の人たちが多く来ており、その影響があつた可能性があります。大宝令段階では、渡来系の技術や技能を持っている人である才伎の掌握を重視したのですから、渡来系技術者はかなり重要だったでしょう。そうすると、大宝令は白村江敗戦以降の百済

系技術者の来日と関係するかもしれません。なぜ海外の才伎を登用せざるを得なかったのかを考えれば、今日のテーマである古代山城の造成とも関係するかもしれません。そういう問題を韓鉄の木簡から発想して、急遽、お話しに入れさせて頂きました。

一 渡来系諸技術の導入

横穴式石室

それでは最初から始めます。渡来系諸事業の技術導入で、前方後円墳における横穴式石室の築造の問題に触れたいと思います。古墳とは何かとか、肥後式石室がどうのこうのということではありません。朝鮮式山城を造るということが、例えば水門にしても石塁にしても、倭国的な技術の前提として前方後円墳や横穴式石室を造るという技術があったのではないかということです。例えば水はけの問題、水門の問題とかですね。山城を造る基礎的な技術の問題を考えたということです。

さて、白石太一郎さんの「横穴式石室誕生」(『横穴式石室誕生』二〇〇七、近つ飛鳥博物館)という横穴式石室のまとめから説明します。石室は元々竪穴式です。古墳の埋葬施設が竪穴式石室の場合、上部が開いており、ここに蓋をしますので完結した空間になります。したがって被葬者は、必ずしも一人とは限らないにしても、閉じられた空間になります。ところが、埋葬施設が横穴式石室になると、追葬が可能となります。

九州には、九州系横穴式石室という、縦穴系の施設に横口部を付けたものがあります。この様式から出てきたのが肥後式石室で、方形の石室に仕切りや石障があります。こういう横穴式石室の世界観とは何か、ということもあります。縦穴式石室の変容型として捉えられている九州式横穴式石室が玄界灘沿岸にあつて、それが肥後に入つて、さらに独自の発展をしているということでしょうか。肥後というのは、このような発想ができる地域で、これは面白いと思つています。

ヤマト王権の中心地域では、五世紀後半になると巨大な前方後円墳にも横穴式石室が採用され、それを畿内型横穴式石室といつています。大仙陵古墳Ⅱ現仁徳陵は、横穴式石室ではないようですが、その後はヤマト王権も追葬可能な埋葬施設を採用するところとなります。このように石室を作る技術と、石室を造る山城との関係は一体どういうことになるのか、こういった問題関心になるわけです。

寺院建設と渡来系移住民

文献からみますと、百濟寺には大匠として書直県、彼は倭漢氏のようにですが、渡来系ということになります。そして、飛鳥寺には、寺工、瓦博士や画工らが百濟から来日しています。その一塔三金堂の伽藍配置には、現在のところ、高句麗の影響があつたとみていいと思います。当時、聖徳太子、つまり厩戸皇子の先生と称されているのが高句麗のお坊さん慧慈ですし、蘇我馬子も高句麗系の還俗した人を師としています。ですから高句麗の影響も考えていいだろうと思います。飛鳥寺の性格として、

百済系とか、いや高句麗系とかだけで一方的に決め付けない方がいいように思います。

八世紀半ばには、東大寺大仏を國中連公麻呂が造っています。公麻呂の祖先は百済国の人で、近江朝廷の世に本蕃の喪乱によって帰化した、要するに白村江敗戦により日本列島にやってきたのです。大仏鑄造時、手を挙げる人がいなくて、私がやると公麻呂が言ったと書かれています。やはり東大寺大仏を造るに際しても、百済系の渡来系移住民が重要な役割を果たしたということになります。

百済からの上番と移住

百済からの上番と移住は、『日本書紀』には秦氏系の弓月君伝承や王仁の伝承があります。王仁は諸の典籍を教えたとあります。文系の人物で、書首らの始祖とされています。それから王辰爾の伝承もあります。船連の祖とされています。これら三つの伝承が、『日本書紀』に残されているということです。

六世紀の初めから半ばにかけて、百済と倭国とはかなり往来がありました。百済は倭国に軍事的支援を求めましたが、一方の倭国は百済に五経博士ら諸博士を求めるといふものです。最後になる欽明十五年（五五四年）の時に大勢の博士らが来ましたが、どんな人が来たのか比較的詳しく書かれています。さて、問題はこの博士たちが、倭から百済への軍事的支援と引き換えのバーターとして来ていることです。その構成は、五経博士・易博士・暦博士とか医博士、それから葉関係の人物もいます。

朝鮮古代史で有名な末松保和さんは、段・高・王・馬とか、こういう姓名は南朝系梁の姓であるということを指摘しています。その後、平野邦雄さんもこの説を継承しています。平野さんは、確か全員ではないかもしれないと言っています。『梁書』を見ていきますと、百済と南朝梁との関係もわかります。百済に渡った南朝系の人たちが、ずっと百済に居住していたのか、南朝梁に戻ったのか、その辺はよくわかりません。しかし、梁の人が百済に行って居住していることは間違いない。そして、その人たちの一部が倭国に来る、という関係になっています。

そうしますと、東アジア世界において、わかりやすいえば漢字文化圏における人々の往来問題とこのを考えていかなければなりません。つまり中国南朝と百済、そして百済と倭国との関係を考えていかなければならない。『隋書』百済伝には、「其の人（百済人）、新羅・高麗・倭等雜りて有り。また中国人有り」とあります。ここには百済のなかに、いくつか外国人が住んでいると書いてある。中国の人もいるということですね。ましてや、八世紀ぐらいになると中国だけじゃなく新羅も含め、お互いかなり行き来していることを考えていかなければならないでしょう。

歴史的に有名なものとして、前方後円墳が朝鮮半島からも見つかりました。倭人が半島に移動している問題と関係するかもしれません。それから白村江の敗戦以降になりますと、天智四年（六六五年）には四百余人が近江に移されます。翌年には男女二千余人が東国に移住している。移住して来た人物には、百済王氏もいます。古代史の方では、百済王氏の場合は、ヤマト王権が百済王権を包摂したと

いう評価をしています。百済とは関係が強いので、百済郡というのも摂津国にあります。ところが、高句麗系の人々の場合の高麗郡、新羅系の場合の新羅郡は、八世紀に入って武蔵国、つまり東国に設置されます。今は埼玉県になります。高麗郡は消滅しましたが、高麗神社が著名です。新羅郡は後に新座郡に改称されています。このように、百済と高句麗、新羅とでは、対外関係に影響されて移住して来た人たちを配置する場所も違ってきます。百済郡のほか、百済系の人々は近江国の移住が多くみられます。

ここでひとつの問題になると思うのは、百済の人たちが列島に来るときに百済の官位を持っているのですが、それを倭（日本）の官位に切り替えています。百済からの人たちが、どのような技術を持っているのかということは、天智十年（六七一年）の叙位の時にわかります。名前が記されているのは、小山上（正七位上相当）までです。比較的多いのが「兵法に閑う」です。やはり兵法に強いのです。ここに山城築城と関係する、憶礼福留や答本春初が出てきます。あとは薬関係や五経関係者ということになります。

さて、百済の官位は佐平がトップ、二番目が達率ということになりますが、実は山城を造る時に百済系の官人の名前がわかる場合だけではなく、わからない場合も想定する必要があります。どうしてかといいますと、一つの仮説にしか過ぎませんが、『日本書紀』や『続日本紀』に記載されるのはい定の官位以上の人です。ふつうは五位以上なのですが、こうした一定の官位を持つ人しか書かれませ

なので、書いていないからといって、たとえば山城に派遣されなかったということにはなりません。天智十年の記事でも、小山下の場合は、百済の達率にもかかわらず、名前が記載されていないので、どのような人物がいたのかは不明です。かつての百済における官位が一番目・二番目の官人でも、倭で与えられる官位は低く扱われていることがわかります。

二 大宰府と鞠智城

古代山城の築城

いわゆる朝鮮式山城と神籠石系山城は、ほぼ同じ時期に造られたことは、学界でほぼ意見が一致してきていると思います。しかし、特に筑紫・周防・吉備・伊予は総領制との関係で解けるように思いますが、東国総領との関係、時期も違うということもありますが、まだ問題点も一部では残っているかと思います。

それから、白村江の敗戦のあと西日本防衛ラインという、狩野久さんが使っている言葉ですけども、築かれます。日本の場合、対外戦争として白村江の敗戦がやはり非常に大きいでしょうし、それから国内戦争においては壬申の乱が非常に大きかった。つまり、国は滅びるものだというのが、白村江の敗戦で理解できて、国内においては王権は勝ち取るものだということを壬申の乱で経験したというように思います。この間の出来事になりますが、白村江の敗戦によって、水城とか山城が造られて

います。また、近江遷都も、おそらく敗戦後の危機感と関係あるだろうと思っています。

西日本において古代山城を築城した地域は、海岸沿いのルート、そして山陽道や南海道という古代の駅路との関係で内陸にできるルート、この二通りがあると亀田修一さんが言っておられます。僕もその通りかと思っています。

これを北九州に当てはめると、鞠智城の場合は道路との関係がある程度言えるようです。筑紫に関する古代山城については、天智三年から対馬の金田城から造り始めたということですが、先ほど言いましたように憶礼福留とか四比福夫が築城に來ています。この名前がない山城についてはどうかということになります。

大宰府から鞠智城までは六十二km、これは直線距離ですから実際はもっと長いかと思っています。鞠智城が出てくる文武二年（六九八年）の段階では、大野・基肆・鞠智の三城を一体として大宰府は考えていると理解できるでしょう。僕がよく使わせていただく赤司善彦さんの山城の変遷説、これは山城の変遷を出土土器から示した説です。もちろん、土器というものは、山城を造ってから作るというよりか、それまでの古いものを使っているわけですから、ちょっと遡ってもそれは致し方がないという具合に思います。一方、こちらの稲田孝司さんの変遷説は、どういう形で石墨その他ができるかというところから出発して変遷を示しています。最初の築城の時期ははっきりしますが、いつまで続くのかという終了時点まではよく解らない部分があります。出土土器から示した赤司説と適合する部分も

ありますが、合わないのめけっこう出てきます。これが稲田説です。

筑紫山城と百済系官人

憶礼福留という人物は天智二年（六六三年）に倭国に来て、それから「兵法に閑へり」ということで叙位され、その後に石野連を賜姓されています。また四比福夫は、泗沘城の「泗沘」という地名と関係があるのではないかと思います。この人は、神亀元年（七二四年）に椎野連を賜姓されている。「連」というどちらかといえば旧いカバネで、大化前代でいうところの伴造です。そういう伴造系の連のカバネをもらっています。

筑紫城を半島の山城と比較すると、やはり泗沘城ということになります。どちらかと言えば逃げ城とされている扶蘇山城に、私は五、六回は行っています。比較するのは、この地域と大宰府ということになります。ただし、同じような形をとっていないのは、河川の流れなどが異なるからです。泗沘城の立地や選地のしかたを応用しながら、この大宰府の設計をしたということも、十分考えられるわけです。扶蘇山城の役割を大野城が担っていたかどうか、というような課題も出てきます。

大宰府周辺には阿志岐城も見つかりました。もっと研究を進めなければなりません。私自身は、南朝系の文化人・技術者たちが百済に行き、その人たちが日本列島の倭国に來たという末松保和さんの説でいいかなと思っています。実は小田富士雄さんも、同じような考え方をしておられます。小田説は、

百済の泗沘都城と南朝の建康都城、そして大宰府都城の古段階を対比しています。小田説をみると、大宰府も白村江以降で間違いない、と私は思います。なお、南朝と百済、そして畿内地域の宮都を考える人も少なくなかったのですが、むしろ大宰府で考えていったらどうなるか、と思います。

さて、亀田修一さんが日韓の山城の比較をされています。向こうには多くの土城・石城がありますが、大規模なものとなれば日朝はほぼ同じくらいです。数としては百済の山城は多いのですが、小規模な城が多い。百済と日本の大規模な山城を比較すると、むしろ大規模な古代山城というのは日本の特徴である、という言い方が可能かと思えます。そういう日朝の違いも理解しておかなければならないでしょう。

三 肥後国と百済

大化前代の肥後と百済

最後に、肥後・熊本と百済との関係はどうかということを考えてみます。古く敏達十二年（五八三年）の記事にある日羅という人物。この人は火葦北国造阿利斯登の子どもで、百済での官位は達率です。『書紀』の記事として載るぎりぎりの官位かもしれませんね。肥後の国造は、火国造・阿蘇国造・葦北国造そして天草国造があります。私もこれまで気がつかなかったのですが、葦北国造の地域には前方後円墳がないのです。こうした地域は、北陸の越の方にもあります。つまり、国造になったから

前方後円墳を造るということでは必ずしもないのです。この考えは、栃木の小森哲也さんのお考えですが、国造支配地域に必ずしも前方後円墳があるわけではないのです。

そのような例が少数だけありますが、これをどう考えるかということです。国造になるということと前方後円墳という葬送儀礼を受けるということは、基本的には共通して考えていいと思うのですが、違う例もあるということはどうみるか、ということです。前方後円墳のない火葦北国造と関係する日羅が、百済と関係しているという記事が敏達十二年（五八三年）にあります。

それから遡って、江田船山古墳の場合ですが、銀錯銘大刀では獲加多支鹵（雄略天皇）です。銘文には、書者が張安とあります。おそらく南朝系の渡来系移住民ではないでしょうか。そして作刀者は、倭人です。つまり、刀を作るということは倭人ができる、しかし書く能力というのは渡来系移住民しかできない、という時代です。出土品を見れば、江田船山古墳の被葬者は百済と密接な関係がある。肥後の北の方にある勢力です。ところが葦北国造は、南の方ですね。その辺をどう考えるかということがあります。

それとこの記事と関係があるかどうか、本当はよくわかりませんが、筑紫火君が百済と関係あるということが欽明十七年条に出てまいります。「百済本紀」にありますから、かなり信憑性がある記事ではないかと思います。それからもう一つ、筑紫大宰との関係というと、おそらく有明海との関係もあるかと思いますが、推古十七年（六〇九年）に百済から来た人たちが肥後の葦北津に泊ったという

記事があります。百済から来たのは、やむを得ずに来たのか、意図的にそうなったのか、その辺を詰めていく必要がありますが、何かを示唆する記事です。

古代山城と渡来系移住民

古代山城はどのようにして造るのか。この問いに、最初は渡来系の人との関わりが非常に強いということ、葛原克人さんが主張されています。葛原説では、百済部・加夜（加耶）・漢部などの名称、そして幡多（秦）・高麗池などの朝鮮三国との関係がある人・地名が出てきます。亀田修一さんは、山城を造る場合、どういうように築城するのか、そのモデルを示されています。発注者がヤマト王権で、その次にくるのが百済の亡命官人ですね。今回のシンポジウムとの関係から言えば、この亡命官人がすべて記載されているかどうか、です。『日本書紀』『続日本紀』の記事には、記載基準の問題から書かれていない例もあるのではなからうか、という問題になってきます。

具体的にいえば山城を築城するときに、設計する前の構想、設計作業、そして選地がやはり重要かと思います。全体としては、築城に対する知識というものがどうであったのか、ということと関係します。瀬戸内海沿岸では、渡来系の人たちがかかなり重要だったということは言われるとおりですが、残念ながら鞠智城を造る際は、肥後国における渡来系人物の状況がよくわかりません。明治大学古代研究所では墨書土器データベースを構築していますが、あまりいい結果はでていません。肥後国でも

墨書土器の悉皆調査をして、データ集成をしたうえで研究していかなければなりません。けれども、鞠智城では、そう簡単に良い史料がありそうにありません。

大宰府と鞠智城

大宰府との関係で、鞠智城をどう考えるか。これまでもいくつかの提言があります。坂本経堯さんが指摘された鞠智城論に、三つの役割があります。①大宰府の支援、②有明海方面の防御、③九州南部の夷狄対策です。九州南部の夷狄対策については、否定的な意見も多いし、有明海方面の防御も否定的な意見が強いように思います。けれども、基本的には三つの役割もあるのではなからうか、というように思っています。というのは、西日本防衛ラインというのは、八世紀に入ってから大宝元年（七〇一年）八月で停止されます。しかし、少なくとも大野城・基肆城そして鞠智城では続きます。その理由を考えないといけないわけです。鞠智城にはこのような特殊性というか、特別な役割を付与されている。大野城と基肆城はやはり大宰府と強い関係がありますから、鞠智城もそうした関係にあるとみるのかどうかです。

その場合、対外的な防御を行なう場所や渡来系の人たちの上陸地点が、博多湾沿岸だけでいいのかどうかです。有明海を含めてもいいのではないか、という問題が生じます。防御となると軍団や兵士が問題になります。肥後国の軍団の問題では、軍団は残念ながら、益城軍団以外は未だよくわかりま

せん。ところが、「韓鉄」の木簡をみていますと、六九二年（壬辰年）の年時です。後には志麻郡韓良郷があり、志麻郡は肥君猪手が郡大領をしている郡です。博多湾沿岸に渡来系の人たちの郷・韓良郷があり、そこに肥君が郡大領です。かつて肥国の方から移って来ているわけですね。そうした地域で鉄製品が造られることは、どういう意味を持つのか持たないのか、ということも考えなければなりません。

また、大野城・基肄城の二城の場合、百済系の憶礼福留と四比福夫の名前が出てきます。ただし、鞠智城の場合は記載がありません。名前が書いていないからといって、派遣されなかったとは、少し考えづらいのではないのでしょうか。推測に推測を重ねて言うことになりましたが、官人は派遣されたけども、位が低かったので『日本書紀』『続日本紀』には記されなかった、ということはありませんでしょうか。歴史学の常道ではありませんが、なにぶん史料が少ないので、想像をたくましくして考えることも、少しは意味があるように思います。

最後は駆け足になりましたが、ご清聴ありがとうございました。